

1. 開催年月日：令和6年2月13日(火) 15時～

2. 開催方式：対面とweb会議ツールを用いて実施。

3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・山川 鉄郎・宮崎 美紀子

web会議ツールにて出席：砂川 浩慶・尾形 敏朗・神田 由築・倉田真由美

放送事業者

代表取締役社長：石原 隆

専務執行役員：山口 真

常務執行役員：宮川 朋之

編成制作局：田倉拓紀・小川英洋・三品貴志・八巻洋平・三瓶祐毅

番審担当：澤 尚志、碓井恭子(書記)

4. 議題

(1) 審議事項：時代劇専門チャンネル「鬼平犯科帳 本所・桜屋敷」独占初放送

(2) 報告事項：日本映画専門チャンネル「11.23『首』公開記念企画◇監督・北野武 ◇特集 西島秀俊に浸る」について

(3) 報告事項：日本映画放送 放送番組の編集の基準一部改訂について

5. 議題(1) ※文中敬称略

テレビ時代劇の金字塔『鬼平犯科帳』シリーズ。中村吉右衛門主演シリーズ終了から8年経った今、当チャンネルで松本幸四郎主演の新たな「鬼平」シリーズを制作した。主人公の長谷川平蔵を始め密偵や同心まで、こだわりのキャストで一新。若き日の平蔵に幸四郎の長男、市川染五郎を起用し親子共演も話題に。監督は時代劇の第一人者である山下智彦。新シリーズはシーズン1として4作品を製作、第一弾の「本所・桜屋敷」は今年1月8日にテレビスペシャルとして放送した。放送に合わせ大掛かりな宣伝展開やパブリシティを行った結果、チャンネル史上最高視聴率(現在の視聴率測定方式)を記録し、チャンネル過去最大の加入者数となった。今後、5月10日劇場公開映画『鬼平犯科帳 血闘』、6月以降放送予定の「でくの十蔵」「血頭の丹兵衛」が続く。

【審議のポイント】

- ① フィルムルックな映像、仕上がりを目指した本作。夜のシーンの「画面が暗い」という意見もあれば「映像がきれい」「光と陰のコントラストが素晴らしい」といった意見もあった。明るい画面作りの多い近年の地上波時代劇と比べ、本作の質感をどの様に受け止めたか。
- ② 初放送を盛り上げるために年末年始から原作者作品や主演俳優の出演作など大規模な関連編成を実施。このような集中宣伝について、編成のボリュームやバランスは適切だったか。

6. 議題(1) 審議内容 ※文中敬称略

・「本所・桜屋敷」の話は鬼平らしい、脇役が光る傑作だ。それゆえ初めて見る幸四郎の鬼平の登場感が薄まってしまったかもしれない。時代劇や鬼平に格好良さを求めたいので、幸四郎の格好良いシーンをもっと増やしてほしい。関連編成については縦編成の方が一日中鬼平が観られるとイベント感が出るフィルムルックな映像の暗さについては見ている最中はあまり気にならなかった。

・松本幸四郎主演で脇役にも個性派俳優が揃っている。第一弾では全員の出番があったわけではないが、今後、それぞれ個性が発揮されるのだろうと期待させる。映画のクオリティを謳う映像は広角で奥行きがあり通常のテレビドラマとは違っていた。テレビモニターは画質が上がるほど最適視聴距離が近くなる法則があり、ハイビジョンではモニターの縦の2倍相当の距離だが、4Kでは1.5倍と縮まる。確かに暗い場面もきれいに観賞でき、映画のような没入感も味わえたが、関係性を知らない視聴者には画面が暗いと感じただろう。イッキ見の習慣があるので横帯でなく縦編成を希望したい。

・線が細いと思っていた松本幸四郎が鬼平に合うのか心配したが、恰幅があってよかった。第一弾の本作では幸四郎の鬼平をもう少し堪能してから若い頃に舞台を変えても良かったかと思う。以前のフジテレビ制作「鬼平」シリーズが、暗闇でうごめく盗賊たちの物語を売りにしていて暗さこそ鬼平ともいえるため、フィルムルックな映像でも違和感はないが、冒頭とラストシーンの場面で映像が暗い故ストーリーが分かりづらいシーンがあった。映像も大切だが、物語上重要なシーンはもう少しわかりやすくしてほしい。横帯編成でなく、縦編成でどの時間帯でも鬼平が見れた方が良かった

・画面の暗さについてはテレビの性能も関係あり、私の鑑賞態勢では黒がベタになってしまった。映画的な映像を目指した心意気は評価するが、家庭でのテレビ視聴ではばらつきが出るだろう。職業柄現役の大学生と触れることが多く、次世代の視聴者となり得る大学生は本作のような時代劇を理解できるのかという観点で観賞した。御新造のような単語がわからずに脱落しそうだと懸念される場面やセリフが多々あった。今は時代劇の地上波放送が激減している。次世代の視聴者層を見据えて、現大学生をモニターに、時代劇のどこがおもしろく、何が理解できないかをリサーチしてほしい。

・関連編成のボリュームにはギッシリ感があって、チャンネルの意気込みを感じた。幸四郎は腰がでっぱりとしていて役作りで体重を増やされたのだろうか。若き日の鬼平を演じた染五郎と対照的であった。まだ1本目なので今後どんな幸四郎の鬼平になるのか楽しみ。シリーズ第1作目は最初に語るべき設定が多くある。松平健さんとの師弟愛や、桜屋敷での淡い恋愛もあったが、盛り込みすぎてメリハリに欠ける。原沙知絵が演じた後年のおふさの登場シーンは、もっと情感たっぷりに描いてもいいのでは。脇役では彦十を演じた火野正平が生き生きして楽しんだ。光と影の点については、去年放送した映画「仕掛人・藤枝梅安」の方がコントラストや闇の魅力を感じた。池波正太郎の小説の要でもある料理シーンは特別予算を組んででもおいしそうに撮影してほしい。

・ 中村吉右衛門の鬼平で作品評を書いたことがある。当時の時代劇は単純明快、勸善懲悪の話が多かったが、鬼平は重厚な時代劇で、火付盗賊改だけでなく盗賊たちもしっかりと描いていると絶賛した。今回の幸四郎版は年相応の恰幅と貫禄もあるし、鬼平らしい洒脱さもあって安心した。長男の染五郎が鬼平の若い日を演じて時をつなぐ構成もよかった。感心したのは『テレビで会えない芸人』の松元ヒロが、五鉄の主人にキャスティングされていたことだ。そのセンスがいい。若い頃に悪いことをやった相模の彦十に、火野正平をからめたのもいい。今後密偵になるおまさは中村ゆりが演じているが、いろいろ染まる俳優。彼女がどう密偵をやるのか期待したい。鬼平犯科帳は群像劇が魅力。今後制作されるであろう第2シリーズでは、安定感に加えて意外性あるキャスティングで「鬼平犯科帳」の群像劇を盛り立ててほしい。

・ 幸四郎の鬼平はすでに何作品も積み上げたような安定感があり、早くも独自の世界観を確立している。周りの与力や同心、彦十もいい。鬼平は光と闇のコントラストというよりは光と影のあわいの部分が重要で、ドラマでも黄昏時が意識されているのが素晴らしい。おふさの嫁入りや、左馬が川面を眺めながら暮れなずむ黄昏時といったシーンでの薄暮の表現が良かった。白州の裁きが下るシーンについて。明るい青空が印象的なシーンであったが光の世界ではなく、闇に生きる覚悟をした心象風景の表現として、光の表現に深みがほしかった。編成に関しては、幸四郎が出演した劇団☆新感線の『ゲキ×シネ』が編成されていたのが舞台好きには嬉しい。幸四郎は歌舞伎以外の舞台でも評価が高く、特に『ゲキ×シネ』は好評。今回編成されたのは舞台から映画への良き橋渡しになったと思う。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

・ 「本所・桜屋敷」と『血闘』は2023年5～6月に撮影し、「でくの十蔵」「血頭の丹兵衛」は11～12月に撮影した。短い間でも、日がたつにつれ幸四郎演じる鬼平にさらに貫禄が増しており、俳優に役が染み込んでいく様子に驚かされる。今回の鬼平新シリーズはドラマと映画それぞれで展開するが、有料放送は限られた顧客向けなので、映画版で新たな層への認知を意識している。次世代の視聴者といえば、映画版『血闘』は都内大学での上映会も予定中。若い層が時代劇に触れるチャンスを増やしていきたい。ご指摘のあった白州のシーン。おふさが見上げる空の明るさは青空すぎると現場でも議論があった。あのシーンは山下監督のこだわり。夫婦雲を青空に浮かべ、おふさと左馬は夫婦になっていたかもしれないとの裏テーマを匂わせた。

・ 今年はオリジナルの新作コンテンツが次々と発表されていく。中でも鬼平はビッグタイトル。周囲から何代目の鬼平はひと話題にされるほど注目され、幸四郎の鬼平はどうだろうと社内でも期待されていたが、1月に放送した「本所・桜屋敷」は視聴者に好評で安心した。これからの成長が楽しみなシリーズになった。

7. 議題(2) 報告事項

日本映画専門チャンネル 『首』について

昨年11月公開の北野武監督作『首』に合わせ、初期の北野作品3本を11月に放送した。現在、配信プラットフォームにない作品群だったため編成が注目され、反響も大きかった。また『首』出演の西島秀俊出演作を12～1月に特集放送した。本人がインタビュー特番で、俳優人生のターニングポイントになったと語った作品を放送した。こちらも未DVD化など視聴にアクセスしづらい作品だったため、良い加入数の結果が残せた。

8. 議題(3) 日本映画放送(株) 放送番組の編集の基準 一部改訂について

「放送番組の編集の基準」の一部変更にあたり、その内容を番組審議会にはかり、4月1日からの変更で承認を得た。

【追加箇所 8条8項】

放送内容によっては、SNS等において出演者に対する想定外の誹謗中傷などを誘引することがあり得ることに留意する。また、出演者の精神的な健康状態にも配慮する。

詳細は4月からの弊社ホームページに掲載する。<https://www.nihon-eiga.co.jp/guideline/>

9. 連絡事項

次回第89回番組審議委員会は、2024年5月14日(火)15時より、オフライン、オンラインのハイブリッドにて開催予定。

以上